『倭訓栞』の中の万葉歌について

片山　武

昨年につづき、本年度も「『倭訓栞』の中の万葉歌について」と題し４回発表させていただいた。

『倭訓栞』については、伴信友補閲の『和訓栞』の上欄に増補語林を記し、さらに『撮壌集』『桑家漢語抄』『林逸節用集』の三書を翻刻して付録としたもの、すなわち井上頼圀・小杉榲邨が増補して明治31年に刊行した『増補語林和訓栞』が、昭和43年11月に名著刊行会から刊行され、これが流布しているので、下欄の中の万葉集を引いている部分をとりだし、数語にとどまるが検討してみたい。

いしき　天智紀に石槨をよめり　萬葉集に石城と見えたり石を疊みて棺を入るゝなり人麻呂死に臨みし時の詠にも磐根しまきてとよめる　これなり

「石城」とあるが「事しあらば小泊瀬山の石城にも隠らば共にな思ひそ我が背」（⑯3806）で、これは「いはき」とよまれている。『時代別国語大辞典上代編』には「石城」（名）岩窟。岩をもってとり囲んだ所。墳墓の石室。とし、

「言痛けば小泊瀬山の伊波帰にも率てこもらむな恋ひそ我妹」（常陸風土記新治郡）の「伊波帰」と仮名書きの例により「いはき」と訓んでよいと思われる。万葉の3806の例も『新編日本古典文学全集　萬葉集』（以下『新全集』と表記）の上欄の注に「○石城にも隠らば共に―イハキは岩で築いたとりで。下にアラムなどの決意表明の言葉が省かれている。親などが許さない恋のために孤立し、籠城も覚悟という気持を表す。」とある。

以上から士清は「いしき」としているが、「いはき」と訓んだ方がよいように思われる。士清のいう「磐根しまきて」は②223で「鴨山の岩根（磐根）しまける我をかも知らにと妹が待ちつつあるらむ」　この「岩根」は「時代別国語大辞典上代編」によるに「いはね〔石根・磐根〕（名）岩。ネは接尾語。」とあり、「石城」とは意味の異なる語である。

いち　市をいふ五十路の義成へし萬葉集に八十ノ衢といへることし又あき反い商の義ともいへり市場ともいふ也…

士清の言う「八十衢」は万葉集に「言霊の八十の衢に夕占問ふ占正に告る妹相寄らむと」（⑫2506）

「海石榴市の八十の衢に立ち平し結びし紐を解かまく惜しも」（⑫2951）である。『新全集』2506の上欄の注に「○八十の衢―四通八達の辻。チマタは道の股の義。古代人は辻占を聞くためにしばしば夕方ここを訪れた。」とある。『時代別国語大辞典上代編』の市（名）に　「市。人の多く集まる所。」とあり、「市」を「いち」とよむについては、「…市郭児伊知比止、一云市人」（和名抄）「東市司比牟可之乃以知乃宮」（和名抄廿巻本）「市アキナフ、イチ、カフ」（名義抄）などから詠めること、同辞典に掲載されているごとくである。万葉集に「…軽の市に我が恋ふる千重の一重も…」

（②２０７）「東の市の植木の木垂るまで逢はず久しみうべ恋ひにけり」（③310）など見られる。士清の解説・万葉集の例の出し方も問題はない。

うまじもの　萬葉集に見ゆ馬といふ物の義犬じものなど同し○馬下乃阿倍橘といへるは甘物といふ成るへし

『時代別国語大辞典上代編』には

うまし〔味・可美〕（形ク）①うまい。味がよい。（例は省略、萬葉は番号のみ掲示）（万3857）②よい。美しい。結構である。この意に用いられる時は、シク活用をした形跡がある。（万2750）　2750は「我妹子に逢はず久しも馬下乃阿倍橘の苔生すまでに」で上欄の注に　○うましもの―美味な物。形容詞ウマシには、美味である意のク活用と好ましい意のシク活用とがある。ここは造語法の点からはシク活用と見られるが、意味の上からは、美味であるの意と考えられる。とある。

士清は「馬といふ物」の義といっている。「馬下乃」の表記はこの一例のみであるが、「馬下」は、漢字の訓を借りた訓仮名であって、「馬」という物の意味ではない。次の説明の「甘物といふ成へし」とあるのがよい。

うみを　績麻の義也古事記に紡麻とも見ゆ萬葉集に績麻と書るも同し

『時代別国語大辞典上代編』に　うみを〔績麻〕（名）績んだ麻糸。つなぎ合わせて縒った麻糸。（万1056）とある。万葉集に「娘子らが績麻のたたり打ち麻掛け倦む時なしに恋ひ渡るかも」（続麻之多田有）（⑫2900）

『新全集』上欄の注に　績麻のたたり―績麻は麻の繊維を紡いで製した糸。タタリは糸を紡ぐ時に巻き付ける、台付きの三本の棒。垂直に立てた棒の頂点がほぼ正三角形になるように置き、これに糸を巻き付ける　とある。

「娘子らが績麻掛くとふ鹿脊の山時し行ければ都となりぬ」（⑥1056）　ともある。『新全集』上欄の注に　績麻掛くといふ―以上二句、同音を利して地名鹿脊を起す序。カセ（枠）は紡績の際、ウミヲや紡いだ糸を巻き取る長さ7、80㌢の棒をH字形またはX字形に組み合わせて作った木器　とある。

士清の説明でよい。

うめみぞ　陰溝也地中を通るをいふ萬葉集にいふ下樋といへる是成べし

『時代別国語大辞典上代編』に　したび〔下樋〕（名）①地下に埋設した木製の通水路。暗渠。（万2720）②琴について表板と裏板との間の空洞をさす。　とある。

万葉集の例は、「水鳥の鴨の住む池の下樋なみいぶせき君を今日見つるかも」（⑪2720）『新全集』上欄の注に○下樋―地下に埋設した通水路。現在、各地の遺跡から丸太をくり抜いたもの、木組み、石組みなど種々の下樋が出土している。　とある。

もう一例「琴取れば嘆き先立つけだしくも琴の下樋に妻や隠れる」（⑦1129）がある。　とある。

今後ともご指導お願いします。　　平成23年５／21，６／18，７／16，９／17）のまとめ